

景気循環・経済成長の総合研究

—景気判断モデルの構築と日本経済の実証分析

Synthetic Studies on Business Cycle and Economic Growth—Construction of Business Cycle Models and Empirical Analysis of Japanese Economy

浅子和美 (ASAKO KAZUMI)

一橋大学・経済研究所・教授



研究の概要

本研究では、日本経済の適切な政策運営に役立てるために、日本経済の現状をより早く、よりの確に把握する体制の確立を図る。より具体的には、景気循環の局面判断の観点からの日本経済の現状分析を行うとともに、経済制度面での歴史の変遷を踏まえた上で、1990年代以降の経済成長率や生産性上昇率の鈍化の原因を解明し、技術革新の活性化や産業構造の転換による日本経済の中長期的パフォーマンスの向上の可能性を探る。

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・理論経済学

キーワード：マクロ経済学、景気循環、景気基準日付、景気判断モデル

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは、浅子和美が代表を務めた平成14-17年度基盤研究(A)(1)「景気循環論の理論的・実証的再考察と景気判断モデルの構築」の研究蓄積を踏襲したものであり、多くのプロジェクト参画者が重複する。

研究開始当初は、日本経済は戦後14番目の景気循環の拡張期にあり、それは後にいざなぎ景気を超えて戦後最長になるのだが、他方でバブル経済崩壊後の長期不況に見舞われ、デフレ経済からの脱却がいつになるかが云々される異例の状況下であり、景気循環の解明を目指す本研究にとっては、むしろ好機との認識があった。

2. 研究の目的

上の「研究の概要」にあるように、日本経済の適切な政策運営に役立てるために、日本経済の現状をより早く、よりの確に把握する体制の確立を図る。そのための景気循環・経済成長の解明を目的とした総合研究である。

3. 研究の方法

研究はいくつかの小グループに分かれ役割分担体制を構築し、定例研究会（景気循環研究会や産業景気研究会）と年2回ペースでの全体コンファレンスを開催する。研究協力者を含めた研究プロジェクトの参画者の内外の学会やコンファレンスでの報告を奨励し、極力その出張旅費を援助する。

4. これまでの成果

平成18年度発足以来の研究計画を多少詳細に記すと、研究の柱としての景気循環研究会と産業景気研究会を定例的に開催してきており、日本経済の景気判断とりわけ景気転換点の決定に関し理論・実証両面から総合的に分析を行ってきた。具体的な研究の遂行は(A)景気循環に関する理論的研究、(B)日本経済のデータ分析、及び(C)景気指標の作成、の3つのサブグループに分けて同時進行させてきている。

景気循環に対する政策対応、特に財政・金融政策のあり方と民間の反応、金融市場や労働市場におけるセイフティネットの意義と経済効率性との齟齬、などについても極力定量的分析に努める。この際、既存の景気予測モデルのパフォーマンス評価、新しい景気判断モデルの構築、景気予測・景気判断のもととなる有用な景気指標の改善・開発といった計量面での精緻化も図る。

このほか、設備投資のストック調整原理や在庫・出荷の循環図に見られる日本の景気循環の特徴が、日本の金融市場や労働市場、あるいは日本的経済・経営システムなどの経済制度一般に関連したものなのか否かなども研究の射程内に捉えている。

アメリカやヨーロッパ諸国、東アジア諸国などの景気循環・経済成長の特徴をマクロ的視点から日本経済の特徴と対比することにも注力し、為替変動と景気循環の関係、とりわけ為替介入が景気安定に果たしてきた役割についての検証も始めている。

[4. これまでの成果 (続き)]

研究プロジェクト全体での現在までの研究成果として、一部前身となる 2002-05 年度の基盤研究(A) (1)の成果も含めると

- ・浅子和美・福田慎一(編)『景気循環と景気予測』東京大学出版会、論文 13 篇収録、全 374 頁、2003 年 7 月。
- ・浅子和美責任編集「ミクロの不均一性と日本のマクロ経済」財務省財務総合研究所『フィナンシャル・レビュー』通巻第 78 号、関連論文 6 篇収録、2005 年 8 月。
- ・浅子和美・宮川努(編)『日本経済の構造変化と景気循環』東京大学出版会、論文 13 篇収録、全 319 頁、2007 年 7 月。
- ・浅子和美責任編集「世界の景気循環」財務省財務総合研究所『フィナンシャル・レビュー』通巻第 90 号、関連論文 5 篇収録、2008 年 8 月。

などがある。さらに、研究成果のエッセンスを一般読者向けに紹介する目的で、日本政策投資銀行系のシンクタンクである日本経済研究所が発行する月刊誌『日経研月報』に、本研究プロジェクトの参加者が分担してシリーズで執筆したものとして

- ・シリーズ「景気循環を語る」連載全 20 回、2004 年 12 月号-2006 年 7 月号。
- ・シリーズ「産業・地域の景気循環と景気指標」連載全 9 回、2007 年 1 月号-9 月号。
- ・シリーズ「日本の景気・世界の景気」連載全 16 回予定、2008 年 7 月号-2009 年 10 月号。

の 3 回のリレー連載がある。

5. 今後の計画

基本的には今までの研究の進捗状況を踏まえ、そのペースを保ちながら当初予定した通りに推進していく方針であるが、2008 年 9 月のリーマンショックの勃発を本研究にとって好機到来と受け止め、積極的に対応して行く所存である。すなわち、アメリカのサブプライムローン問題に端を発した世界金融危機及び世界同時不況は、景気循環研究の視点からは大変貴重なイベントスタディの機会となっており、同時にこれまでの研究成果の蓄積の真価が問われる機会でもある。

当初の計画でも、日本経済だけでなく世界の景気循環を研究対象と設定してはいたが、残りの 2 年間は世界同時不況を睨みつつ、より世界に目を開いた形で研究を推進していくこととしたい。

6. これまでの発表論文等 (受賞等も含む) (研究代表者は太字、研究分担者は二重下線、 連携研究者は一重下線)

Asako, Kazumi, Koichi Ando, and Kazuyuki Matsumoto “Firms’ Perceptions of the Business Cycle and Their Managerial and Financial Conditions,” *Public Policy Review*, Vol. 3 No. 1 (December 2007): 1-26.

浅子和美、小巻泰之「地域別フィリップス曲線と産業構造」(2007 年 11 月)、電力中央研究所社会経済研究所『社会経済研究』No. 55、3-29 頁。

外木好美、落合勝昭、**浅子和美**「アジア諸国の景気と日本の景気:CI と貿易統計による連動性の検証」(2008 年 8 月)、『フィナンシャル・レビュー』平成 20 年第 3 号(通巻第 90 号)、55-72 頁。

Ito, Takatoshi and Tomoyoshi Yabu “What Prompts Japan to Intervene in the Forex Market? A New Approach to a Reaction Function” (2007), *Journal of International Money and Finance* 26, 査読有, 193-212 頁

Itoh Hideshi, Kikutani Tatsuya and Hayashida Osamu, Complementarities among Authority, Accountability, and Monitoring: Evidence from Japanese Business Groups” (2008), *Journal of the Japanese and International Economies* Vol. 22, pp. 207-228

Miyagawa T. “The Impact of Technology

Shocks on the Japanese Business Cycle -An empirical analysis based on Japanese industry data-”, *Japan and the World Economy* 18 (2006), pp. 401-417.

Omori, Y. and T. Watanabe “Block Sampler and Posterior Mode Estimation for Asymmetric Stochastic Volatility Models”, *Computational Statics & Data Analysis* 52 (2008): 2892-2910.

ホームページ等

<http://www.ier.hit-u.ac.jp/~asako>